

モンゴル外交私記－北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第1回）

元在モンゴル日本国大使

元 NEANET 会長

花田 磨公

前書き

編集部から私の履歴書のような原稿をという有り難い執筆依頼を頂戴しました。そこで思いおこさずにいられないのは、故チャドラー・モンゴルアカデミー総裁からの依頼です。

2001年モンゴルアカデミー80周年のとき、当時のチャドラー総裁から、アカデミーから出版するから、日本モンゴル関係の一本を記せと半ば命令のように言われました。しかし、当時、2年連続のゾドと言われる、かつてない大雪害がモンゴルを襲っており、トップ・ドナーの位置にいる日本が何とかモンゴルの被害を最小限に食い止めるべく努力していたやさきですので、現地大使であったこともあり、原稿を書く余裕はありませんでした。（なお、ゾド奮戦記はまた別途触れたいと思います。）

そうこうするうち、チャドラー総裁から「日本にとってモンゴル日本関係はたいして重要ではないでしょうが、モンゴルにとってはとても大事です。モンゴル日本関係をみんな知っているとう人はモンゴル側にもいますが、それは書物や記録の上で知ったのでしょ。ある重要部分を現場で見してきた人は、モンゴル側では皆様他界され、歴史証人は今や貴方だけになってしまいました。貴方とともに歴史が永遠に消えますよ。」とおっしゃいました。胸に刺さりました。今まで多少責務を果たしましたが、まだまだ一部に胸のつかえがあります。今回のチャンスにまた書かせていただけたることを嬉しく思います。

モンゴル外交の現場では息を呑むようなことが多々あり、多少のことを書き残し責務を果たしたいと齢80を過ぎ、思っておりました。東京に出ると1週間は寝込むほど老化がすすみ、外務省保存の当時の文書にいちいちあたらないで、記憶や私的メモにより書くこととしますのでお許しいただきたく思います。今のモンゴル及びモンゴルと日本の関係について考えるよすがとなれば幸いです。

私がモンゴルに関係を始めた当時のモンゴルをめぐる日本の雰囲気や、モンゴル語の学習がどのようなだったかから始めたいと思います。やはりモンゴル世界にお招きするために大事なことだと思いますので。

1. 外務省の調査研修員となる

私は東京外国語大学（東外大）ではモンゴル史の学者を目指しておりました。外語にはそのような専門の先生がおられず、歴史学も東南アジアご専門の河部利夫先生が唯一おられただけでした。

そこで学校の国際関係コースの講座とは別に、歴史学を独学でやることとし、当時赤坂離宮にあった国会図書館に通いつめて、京大の東洋史学者を中心とした東洋史関係の専門書を読みあさりしました。そして自分が読むべき東洋史関係の専門書の膨大なリストをノートにつくりあげたりしていました。

1年の夏休みの終わりには、匈奴フン族同族論に関する論争の経過を纏めて一文にして発表しました。背伸びした一文を中世モンゴル語の世界的権威小沢重男先生に評価され、言語に鞍替えして、学校に残るよう説得を受けました。しかし、私は拒否し（その後葛藤を生みましたがここでは触れません）、歴史学の勉強を継続しました。

幸い、モンゴル史では小林高四郎先生（慶応）や、古代トルコ民族史の護雅夫先生（東大）など学外の先生方のご指導も時に得ることができました。

卒業後は、私の卒論を評価された京大の田村實造先生がすでに私のためにご準備されていた近世モンゴル史料の講読を受けながら、モンゴル近代史の研究を、最初の一年は聴講生としてするよう、塩鉄論の佐伯富先生からご指示いただいていた。京都での生活に若干難がある旨申しあげると、文部省委託の明代満蒙史料の編纂事業があり、編纂作業がバイトになることを佐伯富先生から告げられました。後にウランバートル出張の際、モンゴル国立図書館を視察したおり、京大編纂の明代満蒙資料が備えてあり、ああ、京大はこの大事業を完遂されたのだなど、尊敬の念とともに、もしかしたら、自分がやっていたかもしれない仕事と感無量でした。

しかし、母校の坂本是忠主任教授より2年間外務省に勤務して母校の教師となる道を指示され、田村先生に学ぶせっかくいただいた機会をあきらめることにしました。後に田村先生ご自身外務省の中国課に見えて、おれの生徒を横取りしたなど旧知の中国課幹部に笑いながら怒鳴っておられ、申し訳ないことをしたと赤面しました。

京都から帰宅したら坂本主任教授より「連絡せよ」とのはがきが来ており、電話しましたら、今から待ち合わせてつれて行くところがあると言われました。お目にかかると、外務省へ行くと言われびっくり仰天しました。

道すがら、外務省でモンゴル資料の入手が可能になり、その活用をする要員を求めている。推薦を依頼されたが、さしあたりぶらぶらしているのは君しかいないので、ということでした。そして、古いことを研究してもつまらない、生きている今のモンゴルは誰も知らないから研究したら価値があるとお言葉でした。

古典的-ics が末尾につく物理学、数学、経済学などの学問より、-story が末尾につく化学（錬金術）、歴史学は物語だといわれてバカにされていたので、気にして歴史理論武装すべきとランケをはじめとする歴史理論、最後はルカーチなど勉強しておりましたので、古いことの研究が今日的意義がないとおっしゃるのには同意できませんでした。

でも、先生のおっしゃるように、かつて見たことのない新聞雑誌、書籍を目の当たりにして、これを1人じめで研究できるのかとがまんできず、とりあえず2年間の約束で、外務省の調査研究員になりました。当時、大阪外語大（現阪大言語学部）出身の崎山さんという方が外務省の中国課に

おられ、モンゴル外交の道をつける手始めとして、資料の入手に努力されてきました。外務省の仕事のやり方や社会での立ち居ふるまいについて「てれ怒り」の方法でご指導いただいた方です。「モ」の字は森羅万象収集するとの精神を受け継ぎました。

3月の末でしたが、「お前、今日からここに座れ」と用意された政務班の末席を示されました。私としては今朝聞いたばかりなので、「考えさせて下さい、せめて次週4月から」と申しあげ、ご指導受けていた中国語塾の長谷川良一先生に相談いたしました。先生より「君は渡りに船の人生のようだから、ここは入りなさい」とおっしゃり、これが決定打となり、中国課の調査研究員として務めることにしました。4月の月曜から出勤すると、崎山さんに「言っておくけど、役人と乞食は一日したら止められないんじゃない」といわれました。

しかし2年をまたず翌年4月に任官するよう勧められ、拒否して3ヶ月延ばしました。外大時代の成績で優を40とっているのです、試験合格者にひけをとらない優秀だと人事課の方におだてられ、結局7月に任官しました。以後、定年まで外務省員をまっとうしました。崎山さんの言うとおりでした。

モンゴル外交はただものじゃない筆舌につくせないつらい外交活動でしたが、報われる成果もあり、今ではモンゴルとの関係を切り開けて、外務省員であったのがむしろよかったと思っています。

(2019/7/26)